

監修

小林秀雄

井上靖

三田幸夫

今西錦司

田久彌●山の文学全集
X

ルクロードの旅

朝日新聞社

深田久彌・山の文学全集 X

シルクロードの旅

全十二巻・第六回配本

一八〇〇円

発行 昭和四十九年八月二十一日

著者 深田 久彌

著作権者 深田志げ子

装幀 原 弘

発行者 岡見 璋

印刷所 明善印刷株式会社

発行所 朝日新聞社

東京 大阪 北九州 名古屋

© Shingeko Fukada 1974

深田久彌・山の文学全集

X

目次

シルクロードの旅	七
----------	---

ヨーロッパ縦断	九
---------	---

ソ連領トルキスタンの旅	三
-------------	---

「ノアの方舟の山」登山行	九
--------------	---

沙漠と歴史の国々	一五
----------	----

僻遠の地、西域の都市	一六
------------	----

あながき	一七
------	----

シルクロード	一八
--------	----

シルクロード	一八
--------	----

河西回廊	一九
------	----

陽関と玉門関	一九
--------	----

甘新公路
 砂漠の道
 カラ・ホト
 黒ゴビの王
 茶の道
 ハミ
 トルファン
 ウルムチ
 カラジャール
 ロブ・ノール
 クーチャ
 アクス
 カシユガール
 コータン
 チャルチエン
 あとがき

二〇〇
 二〇六
 二一三
 二二〇
 二二六
 二三三
 二四〇
 二四六
 二五三
 二五九
 二六五
 二七二
 二七八
 二八四

続シルクロード——ラサへの道……………二七

ツアイダム盆地

二九

揚子江の上流

三三

ラサ物語

三五

四川・雲南の奥地

三八

チベットの秘境

四〇

深田久彌・人と作品(十)

近藤 信行………四二

解題

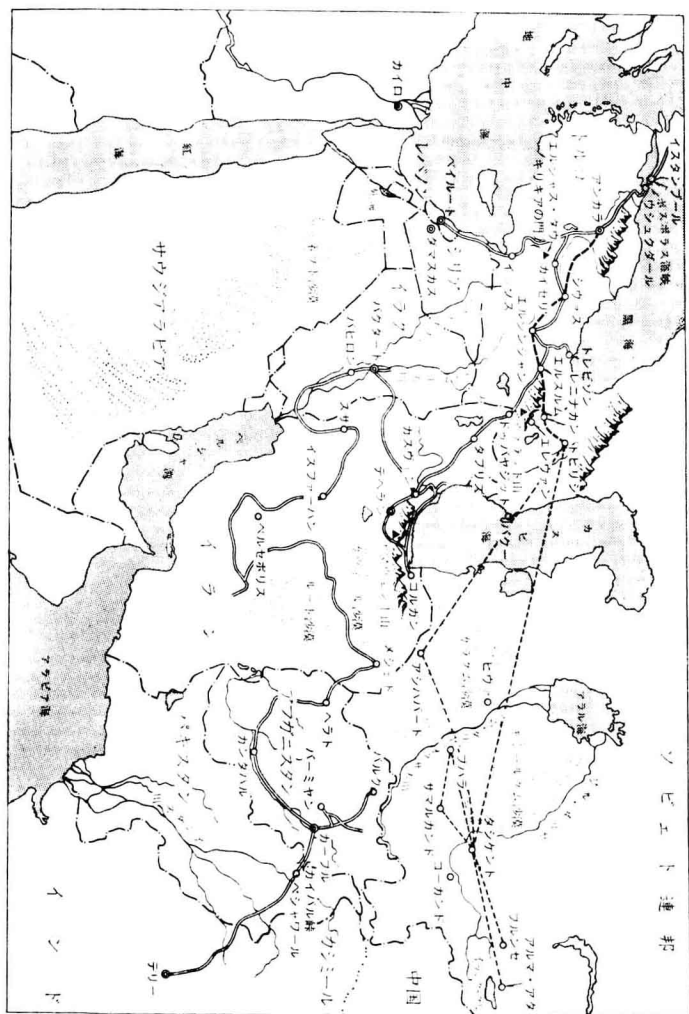
中馬 敏隆………四六

図版・吉沢 家久

シルクロードの旅

「シルクロードの旅」地図

ソビエト連邦



ヨーロッパ縦断

ハノーヴァーからペイルートまで

1

少し古い人なら知っていよう、高田保という劇作家があった。軽妙な社会評論も書き、奇行に富み、多くのエピソードが残っている。その一つ。彼はひどくパリが好きで、パリの地理なら隅々まで知っていた。どこそこの煙草屋の角を曲がると、何という小料理屋がある、ということまで知っていた。そのくせ一度もパリへ行ったことがない。行くつもりで二度も送別会を開いてもらい、二度もセンベツをもらいながら、とうとう行かずじまいだった。

エピソードだから誇張もあるだろう。しかし日本にはこんな人が多い。旅行記がよく売れる。島国だから海外の異郷が特別魅力があるのかもしれない。私もその一人

であった。私の憧れは中央アジア、その探検記や旅行記を読み漁った。しかし中央アジアはパリのようなわけにはいかない。無限に広い。考古学、民族学、言語学、美術史などの宝庫と言われる。私にはそんなアカデミズムはない。その代わり「道」なら知っている。どの道を行くとどんな山が見えるか、甲町から乙町へ行くのに何という峠を越えるか。しかしそんなものは学問ではない。十年前私はヒマラヤへ行った。行く前にヒマラヤの本を二冊も書いた。今度の旅行前にも、『シルクロード』という本を出したし、中央アジアについていろいろ書いた。もう私がそこへ行ってきたものと思いきや人さへあった。かくなる上は行かずにおられない。がそれは普通の海外旅行のように簡単にはいかない。それに私が『シルクロード』に書いた地域は、現在中国の支配下にあって、入国が禁じられている。一番夢の多いところが旅行禁止になっているのである。それでは許された地域だけでも歩いて来よう。それが達しられた。五年前（一九六六年一月～五月）である。

その計画に「シルクロードの旅」と名づけるのは、初め私はあまり賛成でなかった。それはシルクロードの一部には違いないが全部ではないし、あまりシルクロード

と騒ぎ立てるのも気がひけた。しかしこの名づけかたは成功した。世間の人はシルクロードという響きのいい言葉に漠然としたエキゾチズムを感じてくれたらしい。それは私の計画の本質には何の関係もないことだが、旅行の実際の面で大きな助けになった。

今でこそシルクロードという名前は一般に広まってきたが、数年前まではあまり知られていなかった。いや、今でも名前は知っていても実体に疎い人が多い。まずそれを簡単に説明しておこう。教養のあるかたやお急ぎのかたは飛ばして下さい。

シルクロードとは、一言でいえば、東洋と西洋との交渉路である。その道によって東西の文化がふれあった。

それは非常に古くからあったが、シルクロードという名のついたのは前世紀、名づけ親はドイツの名高い地理学者リヒトフォーヘンである。東に漢王朝、西にローマ帝国、この二大文化圏があった頃から、中国の絹が中央アジアを通じて地中海沿岸の都市へ運ばれ、非常に貴重価値を持った。ローマの貴婦人を装った絹は、その一匁が金一匁に価したという。絹は駱駝の背に積まれて、沙漠を渡り、雪の山を越えて、西方へ送られた。シルクロードの名はそこから来た。

同じ道を通って、西の文物や技芸が東へ伝わった。東のタミナルは日本だという説は、正倉院に残っている古いガラス器や文様には遠い西の国から来たものがあるし、大和の仏たちの中にはギリシャの影響の濃いガンダラ仏に似たものがあるからだろう。

シルクロードは一筋の道ではなかった。自然の変化により、また政治的事情によって、違った道が採用された。しかしどの道も、世界でもっとも荒々しい広大な土地を通過せねばならなかった。何十日も人煙を見ぬ荒涼とした沙漠があり、四時氷雪を載せた高い山や峠があった。

自然は時には夢幻的な美しさで旅人を魅したが、時にはその苛酷な暴威で苦しめた。途中には飢渴があり、疫病があり、山賊がいた。

大軍勢もこの道を通って行った。地中海沿岸から発したアレキサンダー大王軍は長駆インドス川流域まで迫った。蒙古に起こったジンギスカンの西征は、コーカサス山脈を越えて南ロシア諸侯を襲った。その他、多くの武将がこの広範な地域に相闘ぎ相戦った。民族が移動し、人種が混淆した。そして幾多のオアシスの町が栄え、かつ亡んだ。

旅行者としては、不朽の記録を残した東の玄奘三蔵、

西のマルコ・ポーロが挙げられる。前者の『大唐西域記』、後者の『東方見聞録』は、中央アジアの研究者や探検家の宝典となった。そのルートにはまだ闡明を待つ個所が残っているが、全部わかったら学者の仕事が無くなる。玄奘もマルコ・ポーロも旅行に長い年月をかけた。病氣にもなった。盗賊にも襲われた。気ぜわしい現代では考えもつかぬ大旅行であった。

十六世紀になって海洋の航路が開かれ、シルクロードは東西交渉の動脈としての役目を失うようになった。数世紀におよぶ空白時代の後、再びこの秘密に充ちた道が注目されたのは、十九世紀の後半になってからである。ニコライ・プルジエヴァルスキー、スウェン・ヘデイン、オーレル・スタイン、その他名だたる各国の探検家たちが勇躍この地へ足を踏み入れた。その中にわが国の大谷探検隊も数えられる。彼等は数千年砂の下に埋もれていた都市を掘りおこし、今は死語と化した文字の文書を発見し、古代文化の跡を明らかにした。

私が好んで読んだのは、これら探検家たちの紀行であった。そのどの一つにも、冒険的要素をおびないものはなかった。ある者は飢え、ある者は倒れ、ある者は捕われ、ある者は殺された。アジアとヨーロッパの間に広が

るこの広大な神秘の地は、私の好奇心をゆすぶってやまなかった。

立て！ と私のロマンチズムは私に命じた。しかし中央アジア旅行の幸福な時代は過ぎ去っていた。シルクロードのはぼ中央に、バミール、カラコルムの高い障壁がある。その東半分が古代シルクロードとして最も魅力に富んだ道であるが、最初に述べたように現在中国が入れてくれない。それでは西半分で我慢しよう。そこは紀元前数世紀にわたってペルシャ大帝国の栄えたところである。沙漠もあり、高峰もあり、多くの古い遺跡が残っている。

単なる私の好奇心が「シルクロード学術踏査隊」という名になって日本を出発するまでに、数ヵ月を要した。まず人から始まる。私は連れを探していた。名古屋の鈴木重彦君が私の張った網にかかった最初の男だった。この元気のいい山男は、彼の計画していたヒマラヤ行が駄目になってやきもきしているところだった。たまたま私と出あって私のプランを聞くと、その座で同行を約して言った。

「僕は英語も何も出来ないけれど、山登りと自動車運転だけは自信があります」

私の相棒としてそれほど結構な資格があらうか。次に現れたのが長沢和俊君。東洋史専攻で、中央アジアに関する著書もある。こんな学者を同伴するのは、歴史事典を持って歩くようなものではないか。三人目は、私と長沢君との共通の若い友人で、出版社に勤めている藤原一晃君。スウェン・ヘデインの全集や西域探検紀行全集の編集責任者で、中央アジアには深い興味を寄せていた。

隊員はそれでは済んだ。後援を朝日新聞社に頼むと、すぐ快い返事があった。朝日からは敏腕な社会部の記者高木正幸君とカメラマンの関沢保治君が同行することになった。これは私には大助かりだった。数年前やはり朝日の後援でヒマラヤへ行った時、現地から原稿を送るのに苦労した。せっかくの楽しい登山だ、物を書くという苦しい負い目がなかったら、どんなにせいせいしたことだろう。こんどはその苦労を朝日の両君が引き受けてくれる。

最後に朝日テレビの吉川尚郎君が加わることになった。早稲田大学山岳部のO・Bで、アンデスとヒマラヤと、連続二回の登山隊の隊長をつとめた好漢である。彼の加入がことに私を喜ばせたのは、今度の計画の中に織りこんでいたトルコのアララット登山に、彼が大きな力とな

ってくれるだろうと期待したからである。

すべての遠征隊がそうであるように、出発に漕ぎつけるまでに、いろいろの交渉や準備の目まぐるしい日が続いた。しかしそういう内輪のゴタゴタ話で読者を退屈させてはならない。私たち七人を乗せたバイカル号は、一九六六年一月二十三日正十二時、多数の見送り人の歓呼の中に横浜の大栈橋を離れた。船上のブラスバンドが奏したのは「螢の光」ではなく、「カチューシャの歌」であったのも、ソ連の船らしかった。

2

最初の私の考えでは、旅行の出発点をイスタンブールと決めていた。アジアの西端、ヨーロッパとの境のボスボラス海峡にまたがったこの古い都市に、かねてから私はあこがれていた。シルクロードの発足地としてこれほどふさわしい所はない。ところが、イスタンブールまで飛行機で飛ぶはずの計画がシベリア経由に変わったのは、主として経済的理由による。私たちは貧乏な隊であった。経費は自己負担としたが、それでは足りないのだとで寄付を仰いだ^{じふんたう}が、それでも潤沢とは言えなかった。でき

るだけ儉約をしなければならない。

シベリア廻りでヨーロッパ經由イスタンブールへ行けば、飛行機代の約半分で済むと聞いては、もうためらう余地はなかった。そう決まると、都合のいいことが出てきた。最初から自動車が問題であったが、それをドイツのハノーヴァーで買うことにした。その車でヨーロッパを縦断してイスタンブールへ行く。シルクロードの前におまけがついた。このおまけは、ヨーロッパが初めての私たちにとって、この上ない楽しい空想をかき立てた。

おまけの部分を手短に走り書きするのをお許しねがいたい。

横浜を出た船は津軽海峡を通過して日本海に出、翌々日の午後三時すぎ凍ったナホトカ港に着いた。船の中の食堂で他の乗客と顔をあわせたが、約八十人のうち三分の二は日本人、たいてい安い費用でヨーロッパへ行こうとする若い連中であつた。私たちは早くも船内のバーで、スタリチナヤというウオッカが大へんうまいことをおぼえた。飲み手が揃っていた。

寒々としたナホトカからその夜汽車に乗ると、寝台車は裸になりたいくらい暑かった。車輛ごとに女車掌が二人ついている。ソヴェトの旅行はインツォリスト（国営

旅行会社）の職員が万事世話をしてくれる。私たちはただ彼等の導くままになっておればいい。気楽ではあるが何か物足りないのは、自発的なプランが認められない点である。それでは旅のおもしろさがなからう、と言うのは贅沢な苦情で、この禁断の国へ入ることが出来るようになっただけでも大きな進歩である。

翌朝眼がさめると、汽車は雪の曠野を走っていた。白樺の林、たまに見える家、地平線を仕切っている遠い山脈、どこまでも行っても単調な同じ景色が続く。これがシベリアだな、と私は昔の流刑囚やカチューシャを想像していたが、地図を見ると、なに、このあたりはシベリアのごく端っこにすぎなかった。

正午すぎハバロフスクに着いて下車。駅前に出ると、その広場に立っている銅像が私の眼を引いた。シベリア探検史を読んだことのある者にとっては忘れ得ない、十七世紀の偉大なバイオニア、ハバロフの像である。この都市の名も彼の名から来ている。どんな將軍や政治家よりも、私はまず探検家に深い礼をする。

インツォリストのバスに乗せられて、私たち日本人の一行は市内見物に連れ廻された。レーニン広場、鉄道大学、共産青年広場、競技場、水泳場、その温湯のブルー

では、零下二〇度の酷寒に、金髪の女性も混じって数人の若者が泳いでいた。しかしどこよりも私を感動させたのはアムール川であった。それは一面の白い氷面となつて、はるか対岸に拡がっていた。むかし旧制高校の寮歌で「アムール川の流血や、氷りて恨み結びけむ」と歌つて以来、私の憧れの川であった。

ハバロフスクからモスクワ行の飛行機が発った時は、まだ薄明るかったが、やがて真つ暗なシベリア上空になる。窓に顔をくつつけても、見えるものは、天上の星と時々地上に乏しい灯りばかり。航空中二度もボリュームたつぷりな食事が出て、モスクワに着いたのは夜の十時頃。ハバロフスクから太陽の進行を追いかけて飛ぶので、モスクワとの時差が七時間、時刻表よりはるかに長い空の旅であった。

モスクワの飛行場からバスで市内の旅客待合所のような所へ連れ込まれた時、不意に一人の瘠^やせた男が私のそばへ来て何やらわめき始めた。酒臭く、からむような口調である。すぐ係員に腕をつかまれて外へ放り出された。ソヴェトにも酔っ払いがいる。私は愉快になった。

モスクワについて私は語ることが少ない。というのは、帝政時代の遺物だという古風なガラシとしたメトロポリ

・ホテルの一室に収まったのは夜半すぎ、そして翌朝にはもうこの歴史的な大都会を去ったからである。ホテルは赤の広場に面していた。朝八時すぎというのにまだ薄暗く、通勤者が足早にぞろぞろ歩いているホテル前の舗道に立って、クレムリンの威圧的な城壁の輪郭を夜明けの空に見ただけであった。

飛行場へ着くまでにすっかり明るくなった。満員のアマステルダム行の飛行機に乗る。私は上空から、ナポレオンの大軍の押し寄せた平原を見おろすのを楽しみにしていたが、一面の雲海しかなかった。数時間の後着陸したのは、気象条件のため、アマステルダムでなく、ブラッセルであった。この不時着のおかげで、私はベルギーの空気を吸うことができた。空港は静かで人も少なく、あたたかな日で、飛行場の向こうを仕切っている遠木立ものどかな春景色に見えた。

ブラッセルからアマステルダム、そこで飛行機を乗り換えて、目的地ハノーヴァーに着いた時はもう夜になっていた。藤原君の大学時代の友人で現在フランクフルトに在住の大久保健治君が出迎えておられたのは、初めてヨーロッパの土を踏む私たち七人には心強かった。

一月二十八日から五日間、大久保君のドイツ語を頼り